

# ガブリエル・ヴィットコップ、 死に魅せられた作家

野呂 康

はじめに

ガブリエル・ヴィットコップは物騒な作家である。死に魅了され、死に憑かれていた。死と毒に冒された壮絶な世界を創造し、おぞましくて奇抜、物騒にして奇怪な幾多の描写を残した。あたかも、社会という病巣に同毒療法を施すかのように、毒を撒き散らした。とはいえ、毒薬とは毒にも薬にもなるものだ。読者には、毒性選択の自由が委ねられている。だが一体、ヴィットコップとは何者か。その有毒で挑発的なテキストの効用は何か。

本論は 20 世紀の棹尾を飾る、この無名作家の紹介を目的とする。ヴィットコップについては専門的な研究はおろか、これまでその名さえ文学史に現れていない。こうした現状に鑑みて、まずは作家の経歴を紹介しておきたい。次いで小説処女作『ネクロフィル』と他の小説について解説を試み、最後に全著作及び作家紹介や書評を書誌にまとめ、今後の研究に資することにしたい。

経歴

ガブリエル・ヴィットコップ（時に作家はガブリエル・ヴィットコップ＝メナルドーと署名する）、旧姓ガブリエル・メナルドーは 1920 年 5 月 27 日、フランス・ブルターニュ地方のナントに生まれた。父親は自由思想の持ち主だったらしく、ガブリエルを学校へ行かせず、少女は幼い頃から書齋で読書をして過ごした。6 歳で母親と死別、8 歳で最初の原稿を執筆する。この最初の作品を 5 フランで買い上げたのも父親であった。17 歳で故郷をあとにしたガブ

リエルは相当の読書家であつたらしく、後年、20歳で「すべてを読破」したと語っている。偏愛の対象は啓蒙の世紀、フランス18世紀文学であった。とりわけサドに関する言及は多い。

第二次世界大戦中のパリで、ガブリエルは20歳以上年長のドイツ人脱走兵と知り合う。同性愛者である男性の名はユストゥス・ヴィットコップ(1899-1986)。戦争が終結し、二人は結婚する。やはり同性愛者であるガブリエルは、この結婚を「知的結合」と名づけている。1946年、二人はドイツに居を定める。ガブリエルはフランス語で小説の執筆を続ける傍ら、『フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトゥング』紙の文化欄を担当し、世界中を旅行しながら、ドイツ語で記事を書いていたという<sup>①</sup>。最初の著作は『E.T.A.ホフマン』と題された研究書である(筆者未見)<sup>②</sup>。次いで、ドイツ語の著作としては、19世紀に蠟人形館を創設したマダム・タッソー<sup>③</sup>の伝記を執筆した。その他、幾つかのドイツ語作品のフランス語への翻訳もある。ドイツ語で研究や記事、翻訳を手がける場合、ガブリエル・ヴィットコップ＝メナルドーの名を用いる傾向がある。

離仏後の生涯をドイツで過ごし、ドイツ語のテキストも少なくないヴィットコップではあるが、筆者の知る限り、小説作品はすべてフランス語で執筆している。その処女作が『ネクロフィル』である。以降、断続的に小説や詩を発表している。だがそればかりではない。「恐怖劇」の発生と系譜を見事に描き出した批評(共著)、奇妙に洗練された写真と色彩鮮やかな図版で飾られたパリの概説本(二冊)、ギリシア神話に登場する女面鳥身の怪物ハルピュイア(ハーピー)の起源や受容を解説し、幾つかの図像とともに印刷したエッセー、女装でも有名な聖職者ショワジ師<sup>④</sup>の『回想録』の抜粋版(筆者未見)など、多彩でかつ特異な嗜好を反映したテキストを世に問うている。

歴史家にしてエッセイストでもある夫は、常に彼女を支え協力を惜しまなかったという。ユストゥスは後年パーキンソン病を患い、1986年に自殺した。ガブリエル自身の言によれば、彼女は夫が「そうするよう励ました」(『ヘムロック』)らしい。後年の彼女自身の死を想わせるエピソードである。

1990年頃からフランクフルトに居を移していたガブリエルは、2002年12月22日、当地で82年の生涯に自ら終止符を打つ。肺癌を患っていたことが

わかっている。「私は [これまで] 生きてきたように死ぬつもりです。何にもとらわれない人間として。」これが死の数日前に、書肆ヴェルチカル社長ベルナル・ワレに彼女が残した最後の言葉であったという。

我が国において作家の知名度は皆無に近い。だが筆者はこれまで二度ほど、その名に出会う機会を得た。一つはフランソワ・リヴィエールとの共著『グラン・ギニョール—恐怖の劇場』の邦訳、いま一つは澁澤龍彦の書棚である。前者は本邦初のヴィットコップの訳書であるが、訳者の主要な関心は 19 世紀に発生し 20 世紀前半にはその幕を閉じる「恐怖劇」というジャンルと、その代表的な作家アンドレ・ド・ロルド<sup>65</sup>)にあり、二人の共著者の紹介はない。他方、『書物の宇宙誌—澁澤龍彦蔵書目録』（国書刊行会）に掲載されていることから、澁澤の書棚にはヴィットコップの『ネクロフィル』が並んでいたことがわかる<sup>66</sup>)。また蔵書のうちには画家ジル・ランボーの展覧会カタログもあり、ヴィットコップはカタログに二つの文章を寄稿していた<sup>67</sup>)。だが『ネクロフィル』の初版刊行以降（1972 年）、澁澤の死（1987 年）までの間に上梓されたヴィットコップ作品は目録にない。察するに、澁澤の関心は著者ではなく、ネクロフィリア、すなわち「屍体愛好」にあったと想われる。結局我が国においてヴィットコップは、演劇を含むフランス文学史の伝統からは省みられず、また「ネクロフィリア」を扱う特異な作家として注目される機会も逸した。

だがフランス語で小説を書き、ドイツ語で研究書や新聞記事を執筆したヴィットコップの知名度は、生国フランスでも高くない。原因の一つとして、処女作以来作家が一貫して、物騒で挑発的なテキストを発表していることが考えられる。読者は或る題材に偏見を抱き、撥ねつけてしまうことがある。われわれは常識と安易な読書行為から或る種の作家を抹殺してしまう。サドやヴィットコップはその犠牲者ではないだろうか。

「女流サド」ガブリエル・ヴィットコップは、18 世紀の作家や哲学者、画家を好む。とりわけサドに対する心酔ぶりはよく知られ、自分は「サド的な作家ではなく、サドの崇拜者」であると自負する<sup>68</sup>)。19 世紀、20 世紀を通じてサドに比せられた作家は少なくない。だが、自他共に認めるサドの愛好者であり、またサドのエクリチュールを実践した作家がどれほど存在しただろうか。

ヴィットコップこそは、サド作品を髣髴とさせる人物たちの生みの親であり、社会とタブーを意識しつつ小説を生産した、唯一、サドの正統な系譜に連なる女性思想家である。

ヴィットコップは子供、宗教、道徳、家族を忌み嫌い、自由、両性愛、女性嫌悪を謳い、インドと啓蒙の世紀をこよなく愛す。とりわけ「同性愛者にして女性嫌い」を公言して憚らなかった。だがこうした「怪しく挑発的」な形容辞は、著者自身よりも著者の残したテキストに当てはまる。その小説では、挑発的な言辞が対立し互いの矛盾を暴きあう。しかもそうした対立は、語用のレベル、すなわち文章の隅々にまで浸透している。登場人物が生ある身でありながら死と死者を愛する日記体小説『ネクロフィル』は、まさしく題名からして、語の対立と矛盾というこの特徴を如実に示している。

### 封印された処女作

『ネクロフィル』は、1972年に書肆レジヌ・ドゥフォルジュから上梓されたヴィットコップの小説処女作である<sup>(9)</sup>。18年後の1990年、同じ出版社から漸くにして再版が出る。さらに8年後、1998年の第三版ではミュザルディヌ社に版元がかわり、2001年の第四版はヴィットコップを〈再発掘〉し、出版に意欲を燃やした書肆ヴェルチカルとスイユ社から出版された。初版以来第三版までは、著者の同意なしに『死の都』なるテキストが抱き合わされ、第三版ではジャン＝ジャック・ボヴェールの序文が挿入されていた<sup>(10)</sup>。「ミュザルディヌ社 [による第三版] は全くひどい版でした。ジャン＝ジャック・ボヴェールの序文はつまらないもので、『ネクロフィル』の後に置かれた『死の都』なるエッセーのようなものはおぞましいことこの上ない」<sup>(11)</sup>。書肆ヴェルチカル社長のベルナル・ワレと、ヴィットコップの長年の愛読者であり、後に著者と親交を結ぶニコラ・ドゥレクリューズの尽力で実現した第四版は、著者が生前に手を入れた最後の版であり、著者による6枚のコラージュ作品を収録した増補改訂版である<sup>(12)</sup>。既にスペイン語、イタリア語、ハンガリー語、ロシア語、スウェーデン語、ルーマニア語に翻訳され、さらにチェコ語、英語、そして日本語版が目下準備中である。

## 『ネクロフィル』

『ネクロフィル』は、リュシアン・N という名の屍体愛好者を登場させた日記体小説である。題名のネクロフィルとは、「死、死体」を意味するギリシア語 (*nekros*) 起源の接頭辞と、「所属」(*philos*) を意味する語から派生した「愛すること、愛されること」を表す接尾辞 (*-phile*) で構成される語で、「死を愛する者、屍体愛好者」となる<sup>(13)</sup>。あまりに直接的で露骨な性描写が災いしたのか、出版と同時に著者ヴィットコップは「物騒な」作家として排除され、その後も正統な文学史からは闇に葬り去られてしまう。リュシアン・N は屍体にしか性的興奮を覚えず、葬送に列席し墓場に通い、屍体を掘り出してきては形状が認識不可能となるまで、自己の欲望を満足させる。登場人物の告白内容と回想は衝撃的であり、淡々とした語り口とは裏腹に、時に吐き気を催させるほど強い喚起力に満ちている。だが、怖いもの見たさや好奇心をそそるだけのオカルト、または扇情的なポルノ小説では決してない。強烈な描写、練り上げられた文体、息もつかせぬ巧妙な展開等、一流の文学にふさわしい諸条件を備えたこの小説には、初版以来 30 余年を経ても常に読者が存在する。

今日においてもなお、われわれは時に小説の記述内容、登場人物の行為を、著作者や訳者の経験や嗜好、または実際の出来事と短絡的に結びつけて解釈し、無理やり理解しようとする。『ネクロフィル』には、この手の愚行を予め見越したかのような仕掛けがなされている。例えば小説には日付が入るものの、常に「19...年」とされ、辛うじて 20 世紀の出来事であることがわかる程度で、正確な年代は特定できない。「19...10 月 12 日」に始まり「19...10 月 31 日」を最後の日付とする日記は約 3 年間の記録のようでもあり、また数年の幅を持つようにも読める。また現実には著者は女性であるわけで、主人公を男性に設定し、男根に基づく欲望と幻想を描き出したかのような小説が、容易にそして如何にも安易に、作家の経験に還元されてしまうはずもない。さらに、ネクロフィリアを題材とした作品が極めて稀であるという、正統な文学史の常識も想起されたい。この常識に抗うような設定は、著者の意識的な操作に他ならず、作られたもの＝フィクションの虚構性を浮き上がらせる戦略といえる。

性行為のことなら、人はそのあらゆる形式について語る。唯一つの形式を除いては。屍体愛好はそれを容認する政体はないし、反体制を叫ぶ若者たちにしても、やはりそれを認めたりはしない。だが屍体愛好とは、唯一純粋な愛に違いない。なぜなら偉大なる白薔薇と呼ばれる「神への知的愛」でさえ、その見返りを期待するのだから。愛に満ちた屍体愛好者にその代償は必要ないし、自らが施す贈り物は何らかの感情を呼び起こすものではない（『ネクロフィル』, p.49）<sup>(4)</sup>。

オスカー・ワイルド経由で想起されたスピノザの「神への知的愛」の解釈が、哲学的にみて正しいかどうかを問う必要はない。この箇所からネクロフィリアが、決して好奇心をそそることを目的とした、これ見よがしであざといばかりの設定でないことがわかる。著者は文学史を知悉し、社会のノルム（規範）を意識しつつ、ネクロフィリアという設定を利用するのである。

## 対立し、矛盾する二つの項

もう少し詳しく小説を見ておきたい。

日記の語り手リュシアン・Nは、パリで父から受け継いだ骨董店を営みつつ、時折屍体を手入れし欲望を満たす。とはいえ彼の行為は「唯一純粋な愛」に由来するため、生者間で観察される互いの力学に基づいた暴力や支配力の行使とは無縁である。また彼にとって、物体と化し抵抗力を持たない屍体は猟奇趣味を満足させる対象ではない。物体（オブジェ）を偏愛するフェティシズム（物神崇拜）ではなく、悦楽に溺れる加虐趣味（サディズム）でもない。物体には性別がないし力関係もない。リュシアン・Nは性別を問わず死者を愛する。屍体のカグワシキカオリを堪能する。彼は生きながら死に憧れる。「死だけが、私の死だけが、時がわれわれに突きつける敗北や痛手から私を解放してくれるだろう」（p.41）。だが死を享受できる生者はいない。生者は死者を媒介として死に触れるが、死と一体化することはない。ブランショを想起するまでもなく、このジレンマは絶対的なものである。物体としての屍体はやがて朽ち、生者の中の記憶としてのみ生き続ける。死者と共にあろうとするリュシアン・Nは、ゆえに記憶の番人である。だが自らの死の実現は、記憶の喪失を伴う。それな

ら、死者＝記憶と共に生きながら、すべてを無に帰す自らの死を回避する手段があるだろうか。小説の結末は、まさにこの問いに答えるべく生者の痛切さと哀しみに満ちている。リュシアン・Nは死（記憶の喪失）と生（記憶の保持）の両立しない関係に引き裂かれ、その必然の中でもがく存在である。ネクロフィリアという装置を通して小説が語るのも、そうした矛盾し、対立する二項を前提とした状況だといえる。

矛盾・対立は小説の隅々まで浸透している。闇夜に墓堀に出かけるリュシアン・Nの名前そのものが、ラテン語の「光」(lux)に由来し、物語の枠組としての二項対立を象徴する。「外の明かり・・・私の宿敵・・・なぜリュシアンなんて名がついたのだろうか、私は光を避けてばかりいるというのに」(p.57)。

または骨董商という職業。それは端的に生命なき物体を扱う商売である。「私は自分の職業が嫌いではない。屍体のような象牙、青白い陶器、死者のあらゆる財産、彼らがかつて作った家具、描いた絵画、人生が彼らに甘美なものであった時に愛用したグラス。まさしく古物商の仕事は、ほとんど理想的なまでに屍体愛好的な職業である。」(p.45、傍点は訳者による)もちろんリュシアン・Nは、物自体に興奮を覚えたりはしない。かつて生者が生産し所有した物体は、その記憶を保存している。かつての生者が残してくれた肉体同様、彼は骨董に死者の記憶を嗅ぎとる。彼はとりわけ、性交をモチーフとした日本の「ネツケ」(＝根付)を愛する。他の骨董に比して、直接的に性と生の記憶を喚起する物体に「ほとんど」理想的なまでの愛着を感じているわけである。

だが彼は、コレクターやフェティシストではない。彼の告白に留保（「ほとんど」）がつけられているのは重要だろう。リュシアン・Nは、やがて腐敗し次第にカグワシキカオリを発する物体を好む。屍体の損壊を惜しむ。氷を置き、毛布に包まり、寒さを凌ぐ。「私はシュザンヌを氷嚢で囲んだ。しばしば彼女の顔にオーデコロンをつけた」(p.41)。屍体の進行を妨げつつ、死者の状態に近づく自らを意識する。「寒さと格闘するためウールの毛布で身を包んだ私は、自分自身の墓に入るわが身を想像した」(p.43)。屍体を生者のように扱い、生者である自らを死者に喩える。

彼にしてみれば、物としての屍体と物体と化した屍体は同じではない。フェティシズムとネクロフィリアの差異は微妙でありながら、その隔たりは無限で

ある。「ふと、バックミラーを覗くと、私の顔は涙で溢れていた」(p.34)。リュシアン・N が死者との離別の度に涙するとすれば、その哀しみの根底には、次第に失われてゆくものに対する喪失感がある。物自体ではなく、死に捉えられたかつての身体、一步一步物体と化してゆく屍体を、彼は愛して已まない。だが本当に彼を魅了しているのは、目の前の物体というよりも、それを媒介として感じられる死と死者の記憶に違いない。彼はネクロフィル、すなわち「死の愛好者」なのだから。

生と死の、生者と死者の乗り越え難いとはいえ、確かに擬似的な二項対立を前に、既婚未婚、老若、性差など、他のすべての二元論は意味を失う。物語の終盤、双子の若い男女の屍体を入手したとき、二という数は一となり、生者の論理に属する差異がすべて無化される。

二人とも性を感じさせないひよろりとした体つきをしていた。少年の男性部分はほとんど形をなさず、少女の胸はないも同然だったが、大いに欲望をそそるもので、私の眼には何かしら天使のような性質を思わせた (p.87)。

「性を感じさせない」(asexués) とは、生者をその身体で暴力的に二分する、「性」そのものが奪われた状態を指す。語り手は双子の性差にまったく頓着していない。欲するのは男でも女でもなく「一つ」の屍体であり(「生前には幾度となくこっそり互いを呼び求めたはずの二人の肉体が、死においてついに一つとなる」(p.91))、大人でもなく子供でもない(「死者たちの様子を見る余裕はまだなかったが、子供のように軽く思えた」(p.86))。それは端的に「死」のための存在であり、「美」そのものである。死のもたらす美にこそ、リュシアン・N はうたれる。

生きる者の世界とは無縁の二人は、死ぬためにこそ創造されていたのであり、初めから二人には鮮烈に「死」の刻印が打たれていたのである。

今や彼らは私の前にいるが、私には二人の醸す美に近寄る勇気がない (p.88)。

双子に「何かしら天使のような性質」が付与されているのも偶然ではない。



天使は天上と地上を繋ぐ媒介であり、性差を超越した存在である。リュシアン・Nにとって、性差を刻印された生者の肉体など何の意味もない（「だが果たしてその腿は少年の方のものだったろうか、それとも少女のか」(p.93)）。彼の天使は神々しく「虹」を放射し (p.93)、部屋の中を「徘徊する」(p.95)。彼は天使を媒介に過去の死者たちと出会い、交流する。「二人を見ていると、これまでの死者たちと再会しているように想われてくる」(p.94)。こうしてリュシアン・Nはこれまで出会った死者たちの記憶に次第に侵食され、やがて死と死者以外の如何なる関心も失ってゆく。食、生命、生きることにさえ、物語の終わりでは、死に捉われた彼の末期が、この上なく見事に描かれるだろう。

## 屍体は誰のものか

ネクロフィリアは文学史上のタブーであり、性差や支配関係といった社会の常識にも対立する。ネクロフィリアという装置は、また、著者の所有概念への猜疑心ともつながる。

そもそも、屍体とは誰の物か。とりあえず、人間の身体を神の所有物とみなすキリスト教の前提を脇に置くなら（それゆえこの宗教によれば、自殺は罪である）、生前の身体は「私」がその所有者であり、「私」が意識する限り「本人」の物であろう。だが、死は「私」が肉体に対してもつ権利を奪う。死後、人は物としての屍体を制御できない。死者の所有権など無に等しい。本人のもので「あった」身体は、葬るべき屍体として他者に委ねられる。葬送は生者の（宗教）感情に基づくもので、かつての身体的所有者のあずかり知らぬ儀式なのである。してみれば、生者は死者から権利を剥奪する。そればかりではない。死者は儀式を通して崇敬、時には崇拜の対象となり、神聖化されタブーを形成する。ゆえに墓は暴かれないし、死者に鞭打つことは忌み嫌われる。タブーとは、社会に秩序を与え、「法律的に」維持する装置に他ならない。禁忌の対象となった屍体は、生者の秩序を維持するために利用されるわけだ。

したがって屍体の所有を犯すネクロフィリアは、死後の肉体（物体）の所有権を疑問に付すと同時に、社会が創りあげる禁忌と秩序を逆なです。生者の

遺物であり、所有権の宙に浮いた骨董は高値でやり取りされるが、美術館におけるミイラやカタコンブのような幾つかの微妙な例外を除いて、屍体を対象にした売買は許されない。肉体に限らなければ、この社会において、かつての生者の所有物を死者から篡奪することで成り立つ商売など枚挙に暇がないはずなのに。だが、誰のものでもないはずの屍体を愛するネクロフィリアは、宗教的な倫理と禁忌の感情に由来する嫌悪感を引き起こす。社会はリュシアン・Nに、制裁または刑罰という名の「暴力」を課すだろう。彼の嗜好と行為は、この所有権の人為性と社会的禁忌の内実を暴きだしてしまうのだ。

ゆえに『ネクロフィル』は、社会の常識と偽善をめぐる思考を潜在させている。リュシアン・Nは束縛や差異化の思考に抵抗しつつ、タブーを通して、装われた自由と偽善性を糾弾し続ける。彼は、社会における抑圧的な二項対立の思考に抵抗する者である。彼の眼には性差も力関係も意味を持たず、彼には相手を支配や領有する欲望はない。彼は社会制裁という名の暴力に怯えながら、徹底した自由への嗜好を抱く。だが社会はその存在を許さないだろう。この小説は、五月革命を嚆矢として世界中で猛威を振るった運動とその終焉としての「正常化」の雰囲気の中で書かれた。その意味を改めて考察する必要がある。

この小説に異常性愛しかみないとすれば、それは表層的な読解という他ない。社会にとっての衝撃的な装置を導入しつつ小説を書くこと、すなわちエクリチュールの実践それ自体が、著者にしてみれば問題を投影する方法であり、抑圧的な社会に抵抗する行為なのである。

## 物騒な小説群

小説として『ネクロフィル』の次に執筆されたのが、『C.の死』（1975年）という詩情溢れる作品である。著者によれば、「私の最も美しい作品」であるという。同性愛者ヴィットコップが夫以外に愛し、ほとんど崇敬の対象とするほど崇めたのが、「C.」氏こと「クリストファー」なる人物であった。彼はインド旅行中、ボンベイで謎の死を遂げる。C.の死に衝撃を受けた著者は、またもや死という時空間を隔てた、到達不可能な出来事へと想いを馳せる。この小説の語り手は、C.の死の様態を幾通りにも表象し再現しようとする。死に憑か

れた著者による悲痛な喪の仕事は、まさしく「最も美しい」と形容するにふさわしい。

生前最後の作品『静謐なる連続殺人（ヴェネチア殺人事件）』（2001年）<sup>(15)</sup>は、『ネクロフィル』が書肆ヴェルチカルから再版されたのとはほぼ同時期に、同社から上梓された。舞台は18世紀のヴェネチア、登場人物アルヴィーゼ・ランツィの4人の妻が次々と謎の死を遂げるという連続毒殺事件を題材とする。著者好みの「奇妙で残酷な」設定が用いられ、犯人探しの楽しみも秘めた推理小説に仕上がっている。早々にポケット版化（文庫化）され、また既に数ヶ国語に翻訳されている。ちなみにドイツ語版の翻訳者は、本作品で独仏の翻訳家に与えられる「アンドレ・ジード賞」を受賞している。

死後出版となった『子供を商う女』（2003年）も18世紀を舞台とした中編小説である。フランス革命前夜の「1789年5月27日」から「1793年夏」までの登場人物の手紙と、「共和暦4年（1795）芽月7日」の日付を持つ、その名宛人からの唯一の返信で構成されている。舞台といい書簡体小説という設定といい、多分に啓蒙の世紀の文学装置を意識した作品である。女商人マルグリットは子供を売買する自身の商売について、事細かに友人のルイーゼ・Lに書き送る。彼女は時に攫い、時に売買を通じて子供を入手する。調達の仕方や場所、買い手による（「外科医ごっこ」などの）子供の扱い等々、日々の営みと衝撃的な出来事が淡々とした調子で語られる。死と啓蒙の世紀と奇怪な告白と。ヴィットコップの嗜好が十二分に発揮された作品であり、既に数ヶ国語に訳されている。

これら以外にも二つの短編集<sup>(16)</sup>、イタリア語とフランス語の二ヶ国語版で発表された詩集<sup>(17)</sup>、『静謐なる連続殺人』と同様に「毒薬」をモチーフとした『ヘムロック、あるいは毒』<sup>(18)</sup>などの小説作品がある。現在のところ入手困難な作品もあり、未読である以上ここで詳述することはできない。だが、小説のライトモチーフとして死や毒が常に現れるようで、ここに著者の嗜好と偏執を見ても間違いではないだろう。

写真やイラスト、版画作品を収録したバリの解説・歴史書にも、こうした嗜好が反映されているかどうかについて、性急な判断は慎んでおきたい<sup>(19)</sup>。また、グラン・ギニョル座と恐怖劇の系譜をたどった『グラン・ギニョル—恐怖の劇場』

(共著) や蠟人形館の創設者マダム・タッソーの伝記といった研究、ショワジ師の『回想録』の編纂と出版、ドイツ小説の翻訳などの行為に、やはり著者の趣味がどのレベルで貫かれているのか、現時点では判断材料に乏しいといわざるを得ない。著者ヴィットコップの関心、嗜好と特異な表現方法に反応してくる読者や研究者の出現を待ちたいと思う。

## 書誌の試み

### ヴィットコップの著作（共著を含む）

以下、「ガブリエル・ヴィットコップ」あるいは「ガブリエル・ヴィットコップ＝メナルドー」名義の著作を年代順に列挙する。無記名であれば前者、GWM とあれば後者を指す。アスタリスク (\*) の付いた著作の存在は、すべてフランス国立図書館 (BNF.) の目録で確認したが、現物は入手していない。書名末尾の (fr.) はフランス語、(de.) はドイツ語、(ita.) はイタリア語での出版を意味する。

\*—(GWM), *E.T.A.Hoffmann Leben und Werk in Daten und Bildern*, Hamburg, Rowohlt Taschenbuch Verlag, 1966, < Rowohlts Monographien ; 113 > (rééd., Frankfurt am Main, Insel Verlag, 1968).(de.)

—*Le Nécrophile*, Régine Deforges, 1972, 1990 (la 3<sup>e</sup> éd., avec la préface de J.-J.Pauvert, chez La Musardine, 1998). Les trois éditions sont suivies de *Nécropole*, texte de J.L.Degaudenzi ; la 4<sup>e</sup> édition, chez Verticales/Le Seuil, 2001, édition revue et augmentée de six collages originaux de l'auteur.(fr.)

—(GWM), *Ein seltsames Leben*, Zürich, Werner Classen Verlag, 1973(de.)(*Madame Tussaud : Biographie* : éditions France-Empire, 1976.(fr.)).

—*La Mort de C.*, Christian Bourgois, 1975, édition suivie du *Puritain passioné*( la 2<sup>ème</sup> éd., Paris, Verticales, 2001, avec la Postface “ Conseil pratique ” de Nikola Delescluse).(fr.)

—(GWM), *Paris avec* les photographies de Fred Mayer, Zürich et Fribourg-en-Brisgau, Éditions Atlantis, 1975.(fr.)

\*—*Les Holocaustes/ Le Sommeil de la raison*, Henri Veyrier, 1976( Recueil de nouvelles contenant : “Les Holocaustes”, “Instant où tout va tomber en poussière”, “Harley”, “Le Sommeil de la raison”, “Image en gris ou Photographie eines Lustmorders”, “Le Ventre” avec une couverture de Gilles Rimbault ) : *Le Sommeil de la raison*, réédition du précédent chez les Verticales, 2003 (“Le Sommeil de la raison”, “Le Prix des choses”(“Les Holocaustes”), “Tel père, telle fille ou Les Trahisons libertines”(“Instant où tout va tomber

- en poussiere”), “Le Ventre”, “Image en gris ou Photographie eines Lustmorders”, “Harley”). (fr.)
- \*—“ Gilles l'éventreur “et” Le Vampire de Düsseldorf ” in *Catalogue de peintures de Gilles Rimbault* (deux textes de GW. pour une exposition de Gilles Rimbeault) à la Galerie Alain Schoffel(29 rue de Seine, Paris) en 1976, Paris. (fr.)
- \*—*Litanie per un 'amante funebre/ Litanies pour une amante funèbre*, éd. Cegna, 1977.(fr., ita.)(trente-trois poèmes de Gabrielle Wittkop, accompagnés de trente et une photographies d'Irina Ionesco, en édition bilingue (traduction en italien de Armando Ginesi)).
- Paris, Histoire illustrée*, avec Justus Franz Wittkop, Zürich et Fribourg-en-Brisgau, Éditions Atlantis, 1978.(fr.)
- “ L'Os ” in Jean-Luc Hennig, *Morgue*, Libres/Hallier, 1979 ; rééd. Verticales, 2007(texte publié à l'occasion de la réparation du livre de Hennig chez Verticales (2007) ).(fr.)
- Grand Guignol*, avec François Rivière, Veyrier/Librairie l'Avenue, 1979.(fr.). (フランソワ・リヴィエール、ガブリエル・ヴィットコップ著、梁木靖弘訳『グラン・ギニョル—恐怖の劇場』、未来社、1990) .
- \*—*Unsere Kleidung*, Insel Verlag, 1985.(de.)
- \*—*Les Rajahs blancs*, Presses de la Renaissance, 1986.(fr.)
- \*—*Hemlock ou les poisons*, Presses de la Renaissance, 1988.(fr.)
- Les Départs exemplaires*, Édition de Paris/Max Chaleil, 1995(Recueil de trois nouvelles : “Idalia sur la tour”, “Les Nuits de Baltimore” et “Une descente”).(fr.)
- Almanach perpétuel des Harpies*, L'Ether Vague Patrice Thierry, 1995, avec les dessins de l'auteur.(fr.)
- Sérénissime assassinat*, Paris, Verticales/Le Seuil, 2001. (*Sérénissime assassinat*, Paris, Verticales/Le Seuil, 2002, col. < Point >).(fr.)
- \*—*Nouveaux Mémoires de l'abbé de Choisy habillé en femme, pour servir de supplément aux modes du Grand siècle*, avec Francois-Timoleon de Choisy, Y. Lambert, 2002.(fr.). un ensemble de collages de Gabrielle Wittkop avec des extraits des *Mémoires de l'abbé de Choisy*(1727).
- La Marchande d'enfants*, avec la préface “ En guise de paratonnerre ” de Nikola Delescluse, Paris, Verticales/Le Seuil, 2003.(fr.)
- Chaque jour est un arbre qui tombe*, Nikola Delescluse éd., Paris, Verticales/Phase deux/Gallimard, 2006.(fr.). 著者の死後、フランクフルトの書齋で発見された *Hippolyte ou Les Félicités de l'égotisme* と題された原稿をドウレクリューズ氏が編集したものの。
- “ Créatures d'hiver ” in aavv., *Qui est vivant ?*, Paris, Verticales (un recueil de textes

d'auteurs “ Verticaux ”の一編), 2007.

\*—(GWM), *Usage de faux*, à paraître.

\*—(GWM), *Carnets d'Asie*, à paraître.

### ヴェットコップによる翻訳

翻訳作品は GWM 名義で発表していたようである。なお、以下の翻訳はすべてフランス国立図書館 (BNF.) のカタログで確認したが、現物は入手していない。

\*—Hermann Lins, *Les Estuaires de la mort : Vor den Mündungen*(1961), traduit de l'allemand par Gabrielle Wittkop-Ménardeau, Gallimard, 1964, col.< Du monde entier >.fr.)

\*—Peter Faecke, *La Nuit du feu : Die Brandstifter* (1963), traduit de l'allemand par Gabrielle Wittkop-Ménardeau, Gallimard, 1966, col.< Du monde entier >.fr.)

\*—Wolfgang Hildesheimer, *Voyage nocturne : Tynset*, traduit de l'allemand par Gabrielle Wittkop-Ménardeau, Gallimard, 1967, col.< Du monde entier >.fr.)

\*—Uwe Johnson, *Deux points de vue : Zwei Ansichten*, traduit de l'allemand par Gabrielle Wittkop-Ménardeau, Gallimard, 1968, col.< Du Monde entier >.fr.)

\*—Peter Faecke, *Le Milan rouge : Der rote Milan*, traduit de l'allemand par Gabrielle Wittkop-Ménardeau, Gallimard, 1968, col.< Du Monde entier >.fr.)

\*—Wolfgang Hildesheimer, *L'Oiseau toc : Paradies der falschen Vögel*(1986), traduit de l'allemand par Gabrielle Wittkop-Ménardeau, Gallimard, 1986, col.< Du Monde entier >.fr.)

\*—Peter Handke, *Le Colporteur : Der Hausierer*, traduit de l'allemand par Gabrielle Wittkop-Ménardeau, Gallimard, 1969, col.< Du Monde entier >(col.<Folio>, 1992).fr.)

### 参考文献

—BLIN, Richard, “*La Marchande d'enfants*”, *Le Matricule des anges*, n°46, 15 septembre-15 octobre 2003.

—le même, “*Chaque jour est un arbre qui tombe*”, *Le Matricule des anges*, n°71, mars 2006.

—CHOUVET, Véronique, “Gabrielle Wittkop - *La Mort de C.*”, sur le site de Chronic'art (site internet), (s.d.).

—D.D.T., “*Hommages à l'écrivain*”, *Nouvel Observateur*, n°1991, le 2 janvier 2003.

- DEL AMO, Jean-Baptiste, “ Wittkop, noir soleil ”, sur son *Blog*, le 10 juin 2007.
- DELESCLUSE, Nikola, <http://blog.gabrielle-wittkop.fr/>
- le même, “ Conseil pratique de Nikola Delescluse ” in *La Mort de C.*, Paris, Verticales/Le Seuil, 2001.(fr.)
- le même, “En guise de paratonnerre” (préface) in *La Marchande d’enfants*, Paris, Verticales/Le Seuil, 2003.(fr.)
- le même, “Gabrielle Wittkop, la passion de la mort” sur le site de la Fondation La Poste, édition du 27 novembre 2003.
- DESLANDES, Amelith, “*Le Nécrophile*, un portrait au scalpel” *Monk*( revue ), n°2, mai/juin 2007.
- DUSSERT, Eric, “*Almanach perpétuel des Harpies*”, *Le Matricule des anges*, n°15, février-avril 1996.
- le même, “*Les Départs exemplaires*”, *Le Matricule des anges*, n°18, décembre 1996-janvier 1997 avec un entretien.
- le même, “*Sérénissime assassinat*”, *Le Matricule des anges*, n°34, avril-mai 2001.
- le même, “*La Mort de C.*”, *Le Matricule des anges*, n°34, avril-mai 2001.
- GARCIN, Jérôme, “La vieille dame indigne”, *Nouvel Observateur*, n°1888, le 11 janvier 2001 y compris un entretien à la veille de Noël 2000.
- le même, “C’était Gabrielle Wittkop Nouvelles d’outre-tombe”, *Nouvel Observateur*, n°1998, le 20 février 2003.
- le même, “Tendance”, *Nouvel Observateur*, n°2129, le 25 août 2005.
- JUIIN, Hubert, “De la nécrophilie comme genre littéraire”, in *Combat*, le 9 novembre 1972.
- KIRKUP, James, “Obituary : Gabrielle Wittkop”, *The Independent*( London ), le 27 décembre 2002.
- LASSERRE, Audrey, “A la mémoire de Gabrielle Wittkop-Ménardeau” *Fabula*(site d’internet) du 30 décembre 2002.
- \*—LINDON, Mathieu, *Libération*, le 24 décembre 2002.
- MAÏ, Franca, “Gabrielle Wittkop, la divine vénéreuse”, *oulala.net*, le 10 décembre 2004 (<http://www.oulala.net/>).
- SAVIGNEAU, Josyane, “Gabrielle Wittkop, sulfureuse et convenable”, *Le Monde*, le 19 janvier 2001.
- SAVIGNEAU, Josyane, “Gabrielle Wittkop, Un auteur à éclipses”, *Le Monde*, le 25 décembre 2002.
- T.G., “*Le Nécrophile*”, *Le Matricule des anges*, n°24, septembre-octobre 1998.
- Wikipédia, l’encyclopédie libre*, “Gabrielle Wittkop”.

## インタビュー

- WITTKOP/DUSSERT, “Les Départs exemplaires”, *Le Matricule des anges*, n°18, décembre 1996-janvier 1997 avec un entretien (s.d.).
- WITTKOP/CHOUVET, “Gabrielle Wittkop ou l’esthétique de la mort”, sur le site de *Chronic'art* (site internet), le 24 janvier 2001, avec une photo de l’auteur.
- WITTKOP/DELESCLUSE, “Entretien Gabrielle Wittkop/Nikola Delescluse” du 4 janvier 2001 à l’occasion de la publication de *La Mort de C. et de Sérénissime assassinat* (Verticales), diffusé par *Radio Campus Lille*, le 24 janvier 2001 ; le texte est repris dans le blog de Nikola Delescluse le 25 mars 2007.
- WITTKOP/GARCIN, *op.cit.*, v.J.Garcin, “La vieille dame indigne”, *Nouvel Observateur*, n°1888, le 11 janvier 2001.
- \*—WITTKOP/PIVOT, Bernard, *Bouillon de culture* (émission de télévision), du 19 janvier 2001.
- WITTKOP/DUBOIS, Félicie, “Gabrielle Wittkop ou la petite fille de Donatien”, <http://www.feliciedubois.com/img/articles/GabrielleWittkop.pdf>
- \*—WITTKOP/ASSOULINE, Pierre, *France culture* (émission de radio).

## 特集

- Paludes*(émission littéraire), Radio Campus Lille, le 22 décembre 2006. L’émission était consacrée à Gabrielle Wittkop pour honorer sa mémoire, 4 ans après sa disparition. Les 5 extraits sonores des lectures sont disponibles sur le blog de N.Delescluse.

## 翻訳状況

- 以下すべてドゥレクリューズ氏のサイトに、表紙写真付きで網羅されている。  
<http://blog.gabrielle-wittkop.fr/post/2007/05/07/Bibliographie-de-Gabrielle-Wittkop>
- 『ネクロファイル』：スペイン語、イタリア語、ハンガリー語、ロシア語、スウェーデン語、ルーマニア語。チェコ語、英語。日本語は準備中。
- Le Sommeil de la raison*：ロシア語出版予定
- Grand Guignol*：日本語
- Les Rajahs blancs*：ロシア語出版予定



- Les Départs exemplaires* : ロシア語出版予定
- Almanach perpétuel des Harpies* : ロシア語出版予定
- Sérénissime assassinat* : ドイツ語 (通常版と文庫版)、スペイン語、ポルトガル語、ルーマニア語、ギリシャ語
- La Marchande d'enfants* : ポルトガル語、スウェーデン語、ロシア語 (ロシア語版には *La Mort de C.* 所収 *Puritan passionné* が同時に収録されている)
- Chaque jour est un arbre qui tombe* : ロシア語

## 注

- (1) 以下本稿筆者は、書誌に記載した著作を含むドイツ語文献を入手していない。ゆえにインターネットなどで書籍の存在を確認できた場合にも、\* を付して未確認扱いとしている。特にヴィットコップが執筆した新聞記事を網羅するような今後の研究に期待したい。
- (2) Ernst Theodor Amadeus (Wilhelm) Hoffmann (1776-1822)
- (3) Marie Tussaud (1761-1850) : (GWM), *Ein seltsames Leben*, Zürich, Werner Classen Verlag, 1973 (*Madame Tussaud : Biographie : éditions France-Empire*, 1976).
- (4) François Timoléon, abbé de Choisy (1644-1724)
- (5) André de Lorde (1871-1942)
- (6) 澁澤の蔵書に関しては、国書刊行会編集長磯崎純一氏の御教示による。
- (7) “Gilles l'éventreur” et “Le Vampire de Düsseldorf” in *Catalogue de peintures de Gilles Rimbault*, Galerie Alain Schoffel, 1976 (筆者未見)。澁澤には『ネクロフィル』刊行以前に遡る「ジル・ランボォ」論がある。「ジル・ランボォーあるいは永遠の裸体について」(1970年初出) in 『澁澤龍彦集成』第IV巻、桃源社、1970、pp.178-181.
- (8) “Gabrielle Wittkop ou l'esthétique de la mort”, *Chronic'art*, le 24 janvier 2001.
- (9) Gabrielle Wittkop, *Le Nécropophile*, Paris, Verticales/Le Seuil, 2001 (初版は1972年刊)。ガブリエル・ヴィットコップ著、野呂康、安井亜希子訳『ネクロフィル』(邦題未定)は国書刊行会より近日出版予定である。以下、『ネクロフィル』からの引用はすべて書肆ヴェルチカル刊行の第四版に拠り、頁番号のみ明示する。
- (10) 筆者はミュザルデイス版 (第三版) を入手していない。
- (11) 前掲、“Gabrielle Wittkop ou l'esthétique de la mort”.
- (12) 但し、六枚のコラージュを除けば、本文の加筆と訂正はほとんどない。ちなみにニコラ・ドゥレクリューズ氏が、2008年現在、ヴィットコップの残した原稿

の管理をしている。

- (13) したがって、この語の初出とされるクラフト＝エービング (Richard von Krafft-Ebing (1840-1902)) による使用法を考えればやむを得ないが、性現象に限定してしまう「死体性愛」なる訳語は誤解を招くし、「屍姦」などは扇情的なだけで、語源的に何ら根拠のない訳語である。以下では主に、ネクロフィリアという語を「死と屍体を愛すること」の意で用いることにしたい。
- (14) 引用中の「神への知的愛」は、スピノザにおいては *amor dei intellectualis* であるが、「神への」(*dei*) を除いた形で、ワイルド『詩集』(1881) 所収、「黄金の華」中の一篇の題名となっている。Oscar Wilde, *Amor Intellectualis*, in *The Complete works of Oscar Wilde*, Russell Jackson and Ian Small éd., vol.1, Bobby Fong and Karl Beckson éd., *Poems and poems in prose*, Oxford University Press, 2000 (日夏耿之介訳「叡智愛」 in 『ワイルド全詩』、講談社、1995、〈現代日本の翻訳〉(底本は1977刊行の『日夏耿之介全集』))。
- (15) 原題 *Sérénissime assassinat* の「静謐なる(静謐この上なき)」なる語は、*La Sérénissime République [de Venise]*、すなわちヴェネチア共和国の別称との掛詞である。
- (16) *Les Holocaustes*, Henry Veyrier, 1976 (後に加筆訂正版 *La Sommeil de la raison* が、著者の依頼により題名を変えて書肆ヴェルチカルから再発される。筆者未見)。  
*Les Départs exemplaires*, les Éditions de Paris, 1995.
- (17) *Litanie pour une amante funèbre*, Cegna, 1977 (筆者未見)。
- (18) *Hemlock ou les poisons*, Presses de la Renaissance, 1988 (筆者未見)。
- (19) *Paris avec les photographies de Fred Mayer*, Zurich et Fribourg-en-Brigau, Éditions Atlantis, 1975 : *Paris Histoire illustrée*, avec Justus Franz Wittkop, Zürich et Fribourg-en-Brigau, Éditions Atlantis, 1978.